

水稻の育苗について

1 令和4年産米を振り返って

移植前後の6月下旬に異例の高温となり、藻類の多発、麦わらの分解に伴うガス害の発生がみられました。一方で、高温・多照傾向が続いたことから、生育は順調に進み、出穂期がやや早くなりました。生育後半も台風の影響などがなく、概ね順調に登熟が進み、昨年 비해増収傾向となりました。近年では、気象変動により作柄が不安定になることが増えていますが、安定生産に向けた第一歩として、根張りの良い充実した苗を育てましょう。

2 目標とする苗姿

葉齢3.5〜4.0で草丈18cm前後のしっかりした中苗の育成を目指します。

3 は種作業

田植え日から逆算して育苗日数25〜35日、浸種期間7日を目安に作業計画を立てます。高温障害を軽減するため、移植時期は6月1〜20日に設定しましょう。

(1) 種子の準備

種子は、採種ほ産種籾を使用し

ましょう。

冷夏で頻発する「いもち病」、近年多い「もみ枯れ細菌病」や「ばか苗病」等を予防するため、温湯消毒又は薬剤消毒を必ず実施します。

(2) 浸種

発芽をそろえるために重要な作業です。種籾容量の2倍以上の水を用意し、「100℃÷平均水温×日数」を目安に浸種します(例・平均水温15℃の場合、7日間程度)。1〜2日おきに種籾袋の上下を入れ替え、種籾に酸素を与えます。薬剤消毒の場合は、薬液から取り出した後、水洗いせずに浸種し、3日間は水を入れ替えないようにします。

(3) 催芽

泡が発生した場合は、酸素が不足しているので、ゆつくりと水を交換します。

種籾の出芽を均一にするため籾を温め、はと胸(芽が1mmくらい出た状態)にします。は種の前の一晚(12〜20時間)種籾を30℃程度の温水に浸漬します。または、濡れむしろ等に種籾を薄く広げ、さらにビニールで包み、2日程度暖かい場所に置きます。

(4) は種

は種量は、催芽籾で一箱あたり100〜125gを目安とします。厚播きは徒長に繋がるため避けま

しょう。

床土を入れ、は種前に育苗箱の底から水がにじむまで十分かん水してからは種し、覆土します。覆土後のかん水はしません。

4 育苗管理

(1) 出芽

幼芽が10mmになるまでは昼夜30℃を目標に管理します。

積み重ね法による簡易出芽を行う場合には、覆土後、1〜2時間日光で温めてから積み重ね、ビニールで被覆します。その際、最上段は温度が上がりがりやすいため、粗なしの土入り育苗箱を置きましよう。2、3日後、幼芽が10mmほどになったら苗代に苗箱を広げます。覆土が持ち上がっている場合は、ジョウロ等でかん水して土を落着かせます。種籾が露出している部分は覆土します。

は種後すぐに苗代に並べる平置き出芽の場合には、寒冷紗をトン



ネル被覆し、ポリフィルムや保温マットなどを重ねて温度を確保します。

(2) 緑化

苗代で水を張る場合は、苗箱の縁より上に水を上げないよう注意します。

本葉1葉までの3〜4日間は、寒冷紗等をかけて強光を避け、昼20〜25℃、夜15〜20℃を目標に管理します。

(3) 硬化

その後は徐々に日光・外気に当て、馴らします。

(4) 田植えまでの管理

かん水は土が乾いてきたら行い、やり過ぎに注意しましょう。苗が老化すると活着が悪くなるため、適期に田植えが行えるよう準備しましょう。

また、「いもち病」や「内穎褐変病」、「イネツトムシ」などの病害虫の発生に備え、移植当日までに殺虫・殺菌効果のある箱剤を施用しましょう。

5 本田準備(土づくり)

高温障害の対策として、根の活力を保つことがポイントのひとつです。ケイ酸資材は倒伏防止の効果も期待できます。

堆肥(10aあたり1〜2t)やケイ酸カルシウム(10aあたり3〜5袋)を施用しましょう。